

---

# 十三矢モコは黄色い月に唾を吐く

シラカベヒロ氏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

十三矢モコは黄色い月に唾を吐く

### 【Nコード】

N2837M

### 【作者名】

シラカベヒロ氏

### 【あらすじ】

神様と呪いとおばけと炭酸飲料。失せ物も待ち人も見つからないなら自分で探す。十三矢モコはおみくじなんて引かない。

## 1 朝食はいつも目玉焼き

「そこ、早くどかねーと凄まじい死に方するよあんだ」

これでもかと曇った生暖かい春の日。

授業開始五分前。校門くぐって数秒後。

遅刻寸前人気もまばらな校門付近午前九時前。

はらりと突然ほどけた靴紐を結び直していた僕は、背後から死を宣告された。

振り返る。バカみたいに髪の毛の長い女の子が、コーラのペットボトル片手に僕を見下ろしていた。真っ黒でまっすぐに黒カーテンみたいなそれは、ぬるく吹く湿った風にふわふわ揺れていた。

「髪なが」

つい思ったことを、そのまま言ってしまった。

女の子は、小さく鼻ではっと笑うと、

「なげーだろ？ ケツまであるからねこれ」

自慢げに髪の毛の先端を掴み束ね、ふりふり見せびらかした。というか、女子の口から出たケツって単語に、僕は少しどぎまぎした。

「えと、で、僕がなに？」

「そこいたら死ぬよって言ってるの」

「うん、いや、なんで？」

僕の疑問に彼女は答えず、代わりにでかいため息をつく。

「あんだあれだ。かなりにぶいタイプだ」

「いや、わかんないけど」

女の子はよいしょっとたるそうに身を屈め、顔の高さを僕に合わせた。鼻と鼻の距離、目測三十センチ。

じいつと僕を見つめる大きな黒目。

が、あるべき部分が、黄色かった。

白目の中に黄色い黒目。もはや黄目。

「目」思わず声が出た。

「え？……あ」白と黄の両方が、くるつとまん丸になる。

「目玉焼き、みたいな、目玉だね」

「……は？」ぽかんと口を開ける女の子。  
ぶわ、と大きく風が吹いた。

四月半ば過ぎだというのに、ほぼ散りかけている校門脇の桜から、  
申し訳程度の花びらが舞って彼女の唇にくつつく。

ぺろ。控えめにそれを舌で拭う少女。半笑いで僕を見る。

「目玉焼きい？」

「いや、目が黄色いから」

「わかるけどさ」

「ハーフ？」

「バカじゃねーの」

くすくす笑いながらキャップをはずし、コーラを一口飲むと、  
彼女はすつと僕を指差した。

「ね、あんた名前は？」

「あ、ななつき七月。ななつきなゆた七月那由多。です」なぜか敬語を使った僕。

「あたし十三矢モコよろしく。でさ七月とみや」

「あはい」

「早く立ちなよ。遅刻しちゃうぞ」

「え、あ、はあ」確かに。靴紐をちゃちゃっと片付ける。

僕と同じく遅刻寸前で焦る生徒達が、少女の後ろを次々駆け抜けて  
行った。腕時計を見る。あと二分。彼女は腕を組んだまま動かない。  
い。

というか自分も遅刻しちゃうんじゃないか、僕だけじゃなくて。  
そもそも何年生だろう、この子。こんなに髪が長い女子、見かけた  
ことない。でも万が一、上級生だったら、タメ口きいたのはまずか  
ったかも知れない。にやにやと笑みを浮かべる彼女を見上げながら、  
僕はゆっくり腰を上げた。

が。

「ん。あれ」

立てない。

体が異様に重たい。

手も足も、ぴくりとも動かない。動かせない。

がっとうから大きな手で押さえられつつ、通常の何倍もの引力で引つ張られているような。まるで地面に固定されている感覚。金縛り、という言葉が頭に浮かぶ。同時に僕は、またか、と軽くため息をつく。

「立てない？」

「うん、なんか、ちょっと」

腰だけ上げたクラウチングスタート的ポーズで、ぐらぐら揺れる僕を見下ろし、モコという子は、

「ま、そりゃ立てねーだろうさ」さも当然のように言う。

「どうということ」

「これ飲んだらわかる」

ずいっとコーラが僕の眼前に出てきた。

くれるのは嬉しいし、コーラは好きだけど、果たして今、僕はこれを飲むべきタイミングだろうか。全然そうじゃないと思う。

とりあえず彼女の親切を無下にしないよう、やんわり遠慮しようと口を開けた瞬間、がごととボトルの飲み口を思っいきりねじ込まれた。飲み口どころじゃない。ボトルの上部五分の一、入ってる。

「う、えぼ、ぐっ」

吐く一歩手前ぐらいの勢いで僕は嘔吐いた。自分の意思と無関係に喉を走り抜けるしゅわしゅわ感。爽やかを強制されるって、拷問になり得る。

「がふ、うっ」

これ以上ないくらいむせて、口の端からコーラを噴出させてしまう。そこでようやく、ペットボトルが乱暴に引き抜かれた。口からだばだば溢れたコーラが地面へ零れ落ちていく。

軽くマールイオンみたいになってる僕を見ながら、モコは特に悪びれる様子もなく、たらつとしゃがんで顔を突き出した。鼻と鼻の

距離、目測、十センチ。

「ふーん」

黄色い目に僕が映っている。

「……なに？」

「たしかに、目玉焼きみたいに見えるなーって」

「え？」

「はいご対面」

モコは胸ポケットからちっちゃいピンクの手鏡を取り出して、僕の前にかざした。

映っているのは、例の黄目。

でもこれは、僕の目だ。

始業のチャイムが、ころんころんと、遠くで鳴り響いていた。

「え……これ、なんで」

「意外と似合ってんじゃん、黄色い目」

「え、そうかな。……じゃなくて」

まんざらでもないようになりアクションをした僕を見て、へへへとモコは嬉しげに笑った。

「ま、それ、しばらくすれば元戻っから」

「そうなの？」

「よし七月、その目玉焼きで自分の足元見てみよー」

言われるまま、反射的に足元に目をやる。

黒い沼、と一瞬思った。違う。

煙だ。

どす黒い、どす黒い煙が広がり、僕の両手足をすっぽり包み込んでいた。

「あ」

思わず声を上げてしまったものの、意外とそこまで驚かなかった自分に逆に驚いた。むしろちょっと腑に落ちた。そうか、動けないときって、こういうのに、こうされてたんだ。ずっと。

「じゃ次。そっち、桜んとこ見てみ」

観光バスの乗客みたく、言われるまま桜の木を見上げる。

「あ」

あ、ばっかで芸のない僕のリアクションはさておき、今度は普通に驚いた。

桜の大木を、大木級にでかい人間　の形をした黒い煙の集合体が、ゆさゆさ揺すっていた。

風で舞ってると思っていた花びらは、このもやもやした黒い巨人が散らしたものだっとならしい。なんとも風情がない。

「見えたー？」

「見えた」というかなんで見えるようになったんだろう。コーラだろうか。凄いな、コーラ。

「もつじきあのでけー黒い男が、あんたに向かって木を倒す」

「え」てか男なんだ、あれ。性別あるんだ。

「あんたはその下敷きになって凄まじい死に方をするってオチ」

「はあ」落ちない。腑に。

「運がねーなあ七月。あはは」

「あ、はは。ていうか、あの黒いのは、なんで僕を？」

「さあ？　おばけの考えることなんて知ったこっちゃねーよ」

「あ、そう」

……あ。

おばけなんだ、あれ。やっぱり、というか。

この黒いもやもやはそういう、非科学的な類なんじゃないかと薄々思ってたんだけど、こつとも堂々断言されると（それも目の黄色い子に）なんだかとても信憑性が出てくる。

おばけは存在するという事実。

この数年間、自分に降りかかってきた、色々。

二つの点が線になりそうで、ならなさそうで、あれこれ考えを巡らせていると、

「で、どーする？　このまま死ぬか？」

モコが目をぎらぎらさせ、真っ白い歯をにこやかに見せた。

ゆさゆさからぐらぐらへ、巨人の揺らす激しさは増している。  
花びらが舞い、僕らの周りをびゅんびゅん飛び回る。

みし。

みっし。

揺れる大木から、不穏な音が二度。

「助けて」

無意識に、そう口にしていた。ふんつと大きく鼻で笑うモコ。

「ま、助けてやれないこともないけど」

「けど？」

「誰にも言つなよ」

低く、静かに囁く。目の黄色さがさつきより濃い。

返事をしようと口を開くより先に、ふ、と鋭い風が吹き抜けた。

今までとは違う風。ぬるくない、冷たい風。

それを受け、彼女はゆっくり立ち上がる。

長い髪を黒い雨みたいに垂らし、僕を見下ろして、ふうふうと大きく深く息を吐いていく。体から全ての空気を出すぐらい深く。ふうふうという細やかな音が、ゆっくりフェードアウトしていく。

やがて、その音が完全に消える。

モコは真一文字に口を結び、強く目を瞑った。そして。

ずずずずうっ。

一気に吸い上げた。

「わ」

あ、から、わ、に変わった僕のリアクションはさておき。

僕を包んでいた黒もやが、掃除機に吸われる綿ぼこりみたく、びゅんびゅん彼女の口へすっ飛んで消えていった。みるみる失せる重たさ。指が動く、足が動く、全部動く。

「……………んぷ」

体感二秒そこらで全部吸い終えたモコは、小さくうめきながら手で口を拭っていた。この吸引力の掃除機があるなら僕は買う。

「よし行く」



言うが早い。モコは僕の手を掴み、力いっぱい走り出す。引つ張られるままに僕も走る。そこでようやく気付く。僕は腰が抜けている。抜けたまま引つ張られるとどうなるか。簡単だ。数歩進んで、すてんと前のめりに転んだ。この間わずか五秒。

そして、六秒目。

耳をつんざく轟音が、僕のすぐ後ろで響いた。

激しく上下に揺れる地面と僕と僕の視界。

振り返る。目の前に、ごろりと横倒れになった桜の木。そして、

ごうごう巻き上がる桜吹雪と砂埃。

エジプトに春が来たみたいだ、とぼんやり思った。

「まさに間一髪ってやつだな」

腰に手を当てモコ。

「そだね」

腰抜けっぱなしで僕。

「うし。じゃやるか」

袖まくりしながら、モコは巨人を真正面に捉え、仁王立ちした。

何をやるのかと訊く暇もなく、彼女はさっきの何倍も何倍も大きく大きく息を吐き、吐いた量に見合うだけ、ずはあああつと豪快に吸った。

いやさすがに、だ。僕は冷静に考える。

巨人相手じゃ、さっきの綿ぼこりみたいにはいかないだろう。こなんの、一息に吸える量じゃない。それに、もしかしたら彼は吸い込まれながら抵抗するかも知れない。例えば、この大木を掴んで振り回したり、ぶん投げたり。そうなると腰が抜けてる自分は逃げようがない。

緩やかに、僕が今日二度目の死を覚悟した、その瞬間。  
すっぽん。

はつきり、すっぽんと。

巨人は僕の目の前で、あっけなく吸い込まれていった。

昔、NHK教育のアニメで見た、金閣大王に名前呼ばれて瓢箪に

吸い込まれる孫悟空、確かこんな感じだった。

「……うー、苦し。砂飲んじった」

顔をしかめ、痰の絡んだ中年男性みたいにげほげほ激しく咳き込むモコ。それから唾をぺっぺと吐き散らし、キャップを急いで開けて、ぐいぐい中身を飲んでいく。彼女のおなかの中には今、コーラとおばけと桜と砂。朝からこのメニューは間違いなく太る。

それにしても、おばけのカロリー量ってどのくらいだろう、とかあれこれ考えていて、ふと我に返った。

そうだ。

僕、この子に命を救われたんだ。今さら、じんわり鳥肌が立つ。生まれて初めて、命を救われてしまった。

「どした、ぼーっとして」

「いや、あの……ありがとう」

「げえふ」

感謝に対してげっぷで返されたのも、生まれて初めて。

「おし、じゃあ行くか」

「え、あ、うん」

いまだ立ち込める砂埃と桜埃を背に、僕らは並んで歩き出した。轟音を聞きつけ、校内から出て来た教師や生徒たちが、口々に何かをわめいていた。僕らは悠々歩きながら、桜へ群がる彼らと次々すれ違っていく。

「あー、んでさ七月。ちょい訊きたいんだけど」

「なに？」

「二年E組ってどこ」

「は？」

ふわ、と長い髪を振り回すようになびかせ、モコは急停止する。そして涼しい顔で、僕の肩にぽんと手を置いた。

「はじめまして」

「え？ え？」

「あたし今日、この高校に転校してきたの。よろしく」

「あ……そうなんだ」

どおりで見たことない感じだと思った。それにしても転校初日から遅刻とは。そして、転校初日から人の命を救うとは。大物か、この子はもしかして。

「てか、あんたそもそも何年生？ タメ？ 上？ 下？ 先生？」

「先生ではないね、制服だからね。で、僕は二年B組」  
「金八だ」

「三年B組だし中学の話だから、それは。ほぼかすってないね、うん」

「まあ、とりあえず、そーゆーことなんで。色々世話になるかもしれないけど、よろしくー」

「あ、うん。じゃあまあ、わかんないこととか、困ったことあれば、いつでも来て、訊いてくれれば。うん」

「おーおー。優しいなーおい」

ばしばし肩を叩かれる。力が無駄に強くて、一発一発が無駄に重い。叩かれる衝撃で揺れながら訊く。

「あのさ」

「なにさ」

「逆に、訊いていいかな」

「質問は二つまでね」理不尽に侵される僕の知る権利。

「えと、じゃあ……おばけってさ」

「おう」

「どんな味？」

ぷつ、とモコは小さく吹き出した。吹き出すに合わせて目が細り、細るに合わせて長いまつげが弾む。

恥ずかしい話、その一連をちょっと可愛いというか綺麗というか、そう感じ、僕は普通に見とれた。

そうしてそれからゆっくり開くまぶたの下に、真っ黒に澄んだ大きく黒い黒目が現れるのを見た。相当、重複した表現だけど、そのぐらい真っ黒だったので仕方ない。

そういえば、僕の目も黒に戻っただろうか。

「どした、じつと見て。あたしの目、やっぱ変？」

「え、あ、ううん」

変ではなく、なんだか少しうらやましいと思っていた。言わなかったけど。

「にしてもどんな味って、なにそのくだらねー質問」楽しげにからつと笑われる。

「ごめん」僕も釣られてちよつと笑う。

「んーでもまあ、そだなー……おばけの種類にもよるんだけどさ」

「うん、うん」

「あの黒い煙、ま、いわゆる『悪い気』ってやつで、どこにでもいるもんなんだけど。味はねえ……うっすーいしょうゆ、みたいな感じ」

「はあ」

体に悪そうだ。てかワルイキって名前からして間違いなく悪い。

それにしても、そんなお被いしないと浄化出来ないようなものを、ずるずるすぽんごちそうさまで済ませるのか、この子は。

僕は「うーんうーん」とその他のおばけの味を上手く表現しようと苦戦する彼女に、自然と湧いた二つ目の質問をぶつける。

「あのさ」

「なにさ」

「君はその……何者？」

「へ？ あたし？」

モコは手を顎にやり、んーとしばし考え、思いついたのか、ずつと僕の鼻先を指差し一言。

「魔女だよ」

「魔女なの」

「知らね」

そして、へつと一笑した。

悪戯っぽく笑うその顔は、僕の知ってる魔女とはずいぶんかけ離

れていて、なんだか少しだけわくわくした。

## 2 茶柱が立てばすぐに折る 前編

「君、早くなんとかしなきゃ凄まじい死に方するよ」

目の前に座る黒服の男が、にこやかに微笑みながら僕に言う。狭い事務所内を照らす蛍光灯が、ちかちかと不穏に明滅した。何かを砕く鈍い音と、苦しげな低いうめき声が聞こえてくる。

僕は何も答えず湯呑みを掴み、ちよつとだけ残ったお茶を、くいと飲み干した。

さて、どうするか。

五月。ゴールデンウィーク明け。

生徒も教師も概ね五月病を患い、校内の雰囲気も郊外の天気もずんと曇っている、週の真ん中水曜日。の、昼休み。

「あたし、あんたと最初に会った時から、ずーっと思ってたことあんだけどさ」

人がまばらな食堂に、モコの声がよく響く。

桜の木が倒れたあの日、僕が言った「わかんないこととか、困ったことあれば、いつでも来て」という言葉を、モコは毎日、非常に忠実に守り続けていた。「数学の教科書忘れて困ってる」とか「理科室がどこかわかんない」とか「休み時間することなくて困ってる」とか「なんでこんなに暇なのかかわかんない」とか言いながら、本当にいつでも僕のところに来た。一度、授業中に来たこともあった。衝撃を受けた。

ちなみに今日は、「一人で飯食うのって味気なくて、あたし困ってたんだけど」ということで、僕はこうして彼女の向かいに座り、別段食べたくもないうどんをすすっている。

「あんたさ、かなり、つかれてるよね」

だらり片肘をつき、頬張ったカレーをもぐもぐしながらモコが言う。

「まあ、そうだね。疲れてると思う」

ず、とつゆを一口飲む。味気ない味が、口にぼんやり広がる。

「なんでそんなにつかれやすいの？」

「朝ごはん食べてないからかなあ」「ここ三年ぐらいそんな生活だ。

「は？」

全然意味がわからないという顔で、髪をくしゃくしゃやりながらモコが僕を見た。

「あー、違う違う」

「え？」

「あたしが言ってるのは、そっちの疲れてるじゃなくてさ」

モコが言葉を続けようとした、そのとき。

後ろから、誰かが僕の首を絞めた。

「ん、う」

「どした？」

「ぐ、かは」

「うわ、うどん出た口から、ぴゅるんって。きたねーなあ、もー」  
強過ぎる。

尋常じゃない。

これは人の力じゃない。

そして何より、僕の後ろは、壁だ。

「がふ、が、あ」

「……あ、そーゆーことか」

僕の断末魔を聞いて、モコはようやく把握したらしく。

ぱつと一瞬で目を黄色に変え、すうすうと宙を吸った。

瞬間、僕は苦しさから一気に解放される。息が出来る。頭から血が下りていく。モコの目はもう黒に戻っている。

「……えふ、げほ」

「だいじょぶ？」

「モコ、水を」

ばしゃ、と顔面に水をもらった。

「水もしたたるつつつてな」

「……」

「んで、話の続きだけど、あたしが言ってるのは」

モコが言葉が続けようとした、そのとき。

後ろから、誰かが僕の頭を押さえつけた。

「あ、うわ」

背後の见えない手は、僕の顔をうどんに浸そうと恐ろしい力でぐいぐい押さえ込んでくる。湯気が鼻先に触れた。抵抗できない。手も動かせない。意思と無関係に顔はうどんへ。もう目の前に汁。

「モコ、うどんが、近い」

「うん見りゃわかるけど」

「がぶ」

ついに顔がうどんに浸った。熱い、と言おうにも口を開くと汁が入ってくる。见えない手は、僕を更にうどんの奥深くへ浸そうと力を込めてくる。溺れる。

「げぶ、あ、ぶ」

「うわー、うどんで顔洗うやつ初めて見た、あたし」

「ぐ、ぐ」足をばたつかせて、なんとか自分の意思を知らせる。

「ん？ …… あーはいはい、またか」

息を吸う音が微かに聞こえる。それに合わせて、体が軽くなっていく。僕は思いつき顔を上げた。上げることが出来た。顔が熱い。油っこい。ひりひりする。

「七味とか入れなくてよかったな七月」

「……うん」入れてたら、確実に目をやられてた。

「にしてもあんたって、面白いよねー。見てて飽きないっつか」

「……そりゃどうも」

ふと周りを見る。食事をしていた他の生徒らが、変な目にあつた僕を変な目で見ていた。軽い咳とかして適当にごまかす。

「でさ、あたしが言いたい『つかれてる』は、まさに今のそれよ」  
「それってどれ」



モコは、握っていたスプーンの先を、とんぼでも捕まえるみたいに僕の眼前でくるくるさせた。

「お前、憑かれてるだろ、ってこと」

つ、の音をやたら強調した発音だった。

「色々変な目にあってるでしょ、七月。今のだけじゃなくて、桜の巨人もそうだし、それ以外にもきつと、いっぱい。どう？」

真っ黒な目が、僕をぎよろりと見つめる。

どう、と言われると、確かにそのとおりだった。変な目には色々あつて。いっぱい。

たとえば学校で。廊下を歩くと蛍光灯がばんばん割れたり、トイレに入ると便器がぐわーぐわーと一斉に唸ったり、放課後一人で教室にいと、がたと黒板がはずれたり。

ちなみにこれは、小学生のときの話。

中学生になると、『変な目』のレベルは上がった。

廊下で見えない何かに足を掬われて、バック宙をかまし頭を強打したり、シャーペンの芯を代えようと芯入れを引っくり返すと注射針がごっそり出てきたり、帰宅すべく靴を取り出した瞬間、びくとも動けなくなつて下足箱で一晩越したり。

そして、高校。

一年ちよつと前の入学式の日、校門をくぐった瞬間、びゅん、と僕の後頭部を何かがかすめ、すっ飛んでいった。

初代校長の銅像だった。

「……とか、そういう感じのことはあつただけど」

「へー、そうなんだー」

モコはカレー（いつの間にか二杯目）をぱくぱく食べながら、至って平坦に感想を述べた。

「え、なにその普通のリアクション」

「なんだよ、もっとでけーリアクション期待してたのお前。アホくさ」

「いや、そうじゃなくて」

自分で話してたって、いまいち現実味を感じられない出来事なのに、普通に受け流されたことにむしろ驚いた。おばけを食べれる子からすると、大した話じゃないのかも知れない。

「つーか、それでよく無事に生きてんな七月」

モコのカレー皿から、さくさく中身が消えていく。それを僕は、ぼーっと見ている。

「無事っていうか……まあ、そうだね、生きてるけど。あんまり無事ではなかったよ、うん」

「どーゆーことよ」

「実は結構長い間、入院してて、去年。脚折っちゃって、というか折られちゃって」

授業中、突如右脚が、めり、とあらぬ方向に曲がり始めた秋の思い出。思い出すだけで、まだ右ひざがじんじんする。

「そりゃ難儀だーね」

「……他人事みたいに言うね」

「他人事だもんよ」正論をぶつけられた。

そうこうしてる内に、ペろりと二杯目のカレーを食べ終わるモコ。ごくごく水を飲み干して、とん、とコップを置き、

「あたし、力になってやるーか」軽く言った。

「え？」

「なんとかしてやるつつてんのよ」

まっすぐ僕を見る鋭い目。思わず訊き返す。

「そんなこと、できるの？」

「あのさ、あんたさ、あたしをなんだと思ってるわけ」

「なんなの」

モコは、ずしつと僕の鼻先を指差し一言。

「巫女だよ」

「巫女なの」

「知らね」

そして、へっと一笑した。なんか、少しデジャブ。

黒々曇った夜みたいな放課後。僕は理科室の前にいた。

腕時計を見る。四時ちよい。モコとの約束の時間まで、まだわりとある。一息つく。

中からは、何やら騒々しい声。僕は、そろっと木戸を開けた。濃い水道水の匂いがぷんと漂い、同時に、熱い声と冷やかな声の応酬が耳に飛び込んでくる。

「神様はいるんですってば！」教壇右側、強い口調の赤眼鏡男、三田<sup>た</sup>。

「どこによ」教壇左側、落ち着いたトーンの女、土条<sup>つじ</sup>先輩。

「神社にいるんです！ 主に！」

「この前行った所、いなかったけど」

「行けば必ず会えるってわけじゃないんです」

「ならアポとつといてよ」

「とれるならとつてますけど、そうじゃなくてですね」

「とにかく私は、そういうオカルティックなものは大嫌いだし、興味もないし、信じてないの。以上」

壇上で言い合う二人は、僕に何の反応も示さない。

椅子に座って彼らをまじまじ見ていた、一ノ瀬<sup>いちのせ</sup>さんだけが反応してくれた。

「七月くん！」

教室で見るより倍ぐらいワット数のある明るい笑顔で、僕に手をぶんぶん振る一ノ瀬さん。動きに合わせて、彼女がいつも首から掛けていた金色の鈴が、涼しげに鳴った。

「一ノ瀬さん、これ、二人、何言い争ってるの？」

「なんかね、雨莉先輩がね、次行く神社で神様見れなかったら、この世に神はいないって結論付けるって言ってて、三田くんが猛反発してるの。面白いよねー」

八重歯がちらっと見えるあどけない笑顔と、ころころした上目づかいで僕を見上げる一ノ瀬さん。その表情が、彼女の前髪ぱっつん

ショートカットと妙にマッチして、やたら愛らしい。ゆえにあんまり直視出来ない。目をなんとなくそらしながら、彼女の隣に腰掛ける。

「次行く神社ってどこだっけ？」

「うんとねー、学校裏の丘登ったところにある、千歩狗神社だよー、確か」

「千歩狗神社」

「なんかね、呪いの神社、とか呼ばれてるらしいの」

怖いねーと小さく言いつつ、でも一ノ瀬さんはにこにこしていた。科学部に入部して二年目。

その活動として、なぜ神社や心霊スポットに週二ペースで出向かなければいけないのか、僕はいまだに解せなかった。

部長である土条雨莉先輩しじょうあまりいわく「非科学的存在の不在を証明することが、科学の実証へ繋がる」とのことだったが、だからってそんなに足しげく通うことないと思う。

怪しげな場所に行くか。

怪しげな場所に行くための怪しげなミーティングをするか。

これが部活の全てだった。実験とか一回もしたことない。

僕が実験器具を見ながら物思いにふけていることなんて知りもせず、三田と土条先輩は論争を続けていた。僕と一ノ瀬さんは観劇するようなスタンスで、壇上の彼らを眺める。

「先に言っときますけどね、土条先輩。千歩狗神社へはちゃんと襖みぞぎをしてから行って下さいね」

三田が神経質そうに赤い眼鏡をずり上げる。それを受け土条先輩は、

「しなかったらどうなるの。死ぬの」

肩までかかる髪を指先でだけだるげに撫でながら、眠そうな目（いつもそういう目をしている）で三田を見る。

「死にます。仮に死ななくても呪われます」

「なら仮に呪いがあるとして、呪われたらどうなるの」

「災いが降りかかります。事故にあったり、怪我したり」

「というか三田くん。あなたは、私が楔がなければいけないぐらい汚れてるって言いたいのか」

「そういうことじゃないんですよ俺が言ってるのは」

「ねね、七月くん」

二人の攻防を見ながら、一ノ瀬さんが小声で尋ねてくる。

「ミソギってなんだろう？」

「さあ、なんだろう」

「雨莉先輩、意味わかってるよねきっと」

「うん、『楔がなければ』とか言っただけなら活用形使ってたし」

「二人とも詳しいよねー、こういうオカルトなこと」

「そうだね。僕ら置いてけぼりだよね比較的」

僕と一ノ瀬さんは、小さく苦笑し合った。

土条先輩は、口では嫌いと言いつつ、非科学的なものへの興味も知識も、人一倍あるらしかった。次どの神社に行くか決めるのはいつも彼女だし、今どの心霊スポットが熱いみたいな情報もたんまり持っている。なのになぜ、表面上、オカルト嫌いを装うのか、僕にはよくわからない。

一方の三田は、僕の中学のときからの友人なのだけど、「高廻ノ<sup>たかののみや</sup>野宮中の水木しげる」と呼ばれていた人物で、愛読書は遠野物語だった。そんな彼がなぜ科学部を選び入部したのか、僕はやっぱりよくわからない。

いまだ僕のほうを見ない壇上の二人から、ぼんやり視線を上になぞらす。そこには時計。

「あ」

「ん、どうかした？」

一ノ瀬さんがゆるく首を傾げる。ちり、と彼女の首の鈴が鳴る。

おばあちゃんちにこういう猫いたな、そう言えば。

「えと、僕、今日ちょっと用事あって、それで部活休むって言いに来ただけど」

「あ、そうだったんだ。了解、雨莉先輩には私から言っておくね」  
ふんわり笑顔の一ノ瀬さん。それにしても、すぐ目の前にいる人  
に対する言づてを頼むのって、凄くエコじゃない気がする。

まあ、とりあえず用は済んだ。そろそろ行かなきゃ間に合わない。  
ぶんぶん手を振る一ノ瀬さんに軽く手を振り返し、三田と土条先  
輩の呪い論争を聞きながら、理科室を後にした。去り際、掃除用具  
入れと人体模型が仲良く僕に向かってぶっ倒れて来たけど、ひよい  
つと軽く避けた。

「四時半集合」とモコに言われ、現在四時四十分。モコはいなか  
った。というか、誰もいなかった。カラスだけがぎゃあぎゃあ鳴い  
ている。

狭い千歩狗神社の境内に、僕は一人で佇んでいた。

奇しくも、科学部で話題になっていた神社が、モコの指定した待  
ち合わせ場所だった。全然そんなつもりじゃないのに、下見に来た  
みたいになってしまった。

連絡をしようにも、モコは携帯を持ってない。

僕は途方に暮れつつ、今一度、辺りを見回した。

赤い鳥居。白い石畳。小さい狛犬がちょこんと二匹。四方を取巻  
く深い鎮守の森。そして目の前には、狭い境内に不釣り合いな巨木。  
それに注連縄。どうやらご神木らしい。

そして何より、お社だ。

百葉箱を一回り大きくした程度のサイズ。でも、圧倒的な存在感  
と威圧感を放っていた。その理由は。

おふだ、だ。

壁、柱、扉、屋根、注連縄、賽銭箱、鈴、鈴の紐、扉に掛かった  
大きな南京錠。その全てを、おふだが覆い尽くしていた。

とにかく全面という全面に、おびただしい数の紙が、びっしり隙  
間なく。何百枚。もしかしたら何千枚。だから、お社の色は、ぼん  
やりくすんだ白だった。もはや木製なのかどうかさえ、定かではな

いレベル。そんな異様な物体を前に、僕はモコを待つ。

なるほど、確かにこの風格は呪いの神社と言われてもしょうがない気がする。そう言えば、楔がないと死ぬとか三田が言ってた。しかし僕は、完全に楔がないで来てしまった。どうするか。楔ぎたい楔がなきゃいけない。でも、楔ぐって行為が何を指すのか全く見当がつかない。

とりあえずお参りでもしとけばいいのか。安易な発想で、僕は札だらけの賽銭箱の前に歩み寄る。こつこつと鳴る石畳。

「……あ」

思わず、声が出た。

賽銭箱とお社の扉の間、ほんのわずかのスペースに、男の人が正座していた。くたびれた灰色の背広を着た、がりがりの中年男性。背中しか見えず、顔はわからなかったけど、薄くなっている頭頂部がよく見えた。

この狭い空間に入り込んでいる姿からして不気味だったけど、何より僕が怯んだのは、彼が頭上高くで、しっかり手を合わせていることだった。拝んでいる。その手は小刻みにぶるぶる震えていた。この上なく強く、拝んでいるように見えた。

なんだか気付かれちゃいけないような気がして、足音を殺し、男性を見据えたまま、ゆっくりゆっくり後退した。

「おまつとさん」

背後からでかい声。抜けかける腰。振り返る。

黒い髪。黄色い目。白い肌。そしてなぜか赤い体育ジャージ上下を着ている、十三矢モコ。

ぎゃあぎゃあうるさかったカラスは、いつの間にか鳴き止んでいた。

「どーした七月、震えてんじゃない。うちの神社の立派さに、感動したか」

「……」

僕は、ふるふると無言で首を振った。

### 3 茶柱が立てばすぐに折る 後編

モコは僕の視線を追い、「あー、あの人は今、気にしなくていい」とだけ言つて、腕を引つ張った。引つ張られるまま僕は歩いた。通りがけにちらつと賽銭箱を見る。中年男性は手を合わせたまま動かない。モコがじゃりじゃり砂利を踏み鳴らしても反応しない。彼から目を離さず、僕はただ歩く。お社の裏へ裏へとモコは進んで行つた。連れて行かれるままに、歩いて歩いて、前を見る。

体育用具倉庫。そういう見た目の、こじんまりした掘つ建て小屋。

「モコ、ここ、なに？」

「地獄の一丁目」

わけのわからない事をしたり顔で言いながら、からからつと戸を開けるモコ。生ぬるい風が中から少し吹く。

目の前には、向かい合う革張りのソファが二つ。その間に木の長机。部屋の奥には、職員室みたいな事務机が一つ。その脇に灯油ストーブ、上にはやかん。

なんというか、町の小さな不動産屋みたいだった。

「ま、てきとーに座れよ」

モコはソファの一つに深々と腰を下ろし、長机に両脚をどんと乗つけて、ふんぞり返った。小汚い事務所の雰囲気と相成つて、その画はまるでやくざ映画。僕は座らず、モコに小声で尋ねる。

「あのさモコ」

「なにさ七月」

「えと、あの人は……誰？」

控えめに、奥に見える事務机のほうへ手を伸ばす。

真っ黒いスーツを小奇麗に着こなした、若い男が座っていた。座つてじつと僕を見ていた。につこり笑いながら。

ぼさぼさ無造作に肩まで伸びた髪、胸元に鮮やかに映える真っ赤なネクタイ。そして何より、貼り付いたようなその微笑み。なんだ



か、絵に描いたように胡散臭い。目が合う。目が離せなくなる。モコは髪をくしゃっとやりながら、

「それ、あたしの父さん」

「え」

僕のその声を合図みたいに、男は頭を掻き掻き、立ち上がった。

「どうも初めまして。モコの、父です」

丁寧な口調、優しい声色。深く頭を下げる男性。僕も慌てて頭を下げる。

「あ、えっと、七月那由多です。あの、十三矢さんには……色々お世話になってます」

「もしかして」

父親は、僕の顔の中心をまっすぐ指差した。

「モコの彼氏くんかな」

「え、いや」

「そーあたしの彼氏」

否定するより先に肯定された。モコを見る。その顔は真剣そのもの。これは性質が悪い。

「いや、僕、違います全然」

「はは、照れなくていいんだよ」目を細めて笑う父親。

「あの、違うんですほんとに」

「時に酒はどうだい。飲めるかい？」

「飲めないです、法的に」

「ははは、じゃあ親子の杯はお預けだね」

「すみません。いや、じゃなくて」

「その代わり、結婚前夜にたっぷり飲もう。うん」

「えっとお父さん、あの」

「お義父さん？ まだ私は君を認めてはないよ」

「いや、めっちゃめっちゃ認めてたじゃないですか」

「私がいつ何を認めたのかな」

「今、結婚前夜とか言って」

「誰と誰が結婚するの」

「僕とモコが結婚するんですよ。……え、なに言ってた僕」  
「ぶっ」

モコから破裂音が聞こえた。見ると、口に手を当て小刻みにひくひく肩を揺らしている。向き直ると父親も、同じ格好でひくついていた。ほどなく起こる笑いの渦。その中心で啞然とする僕。

「いや、ごめんごめん、はは」

黒スーツの男が、苦笑しながら僕の前に湯呑みを置く。

「あ、どうも」

「バカだねー七月」

にやにやしながら、モコは僕の前に置かれたその湯呑みをひったくり、ごくごく飲んだ。

「バカってなんで」

「だーって、父親なわけないじゃん。見りゃわかるでしょ?」

モコに指差され、男は頭をかりかり掻きながら、事務机へ戻った。

「まあ……確かにお父さんにしちゃ若いなって思ったけど、僕も」

「だろー? それにあの格好。どっからどー見ても神主じゃん」

「いやそれは納得出来かねるけど」

「なんでよ。だって正装してんじゃん。じゃあ神主じゃん」

「なんだよその論理の飛躍」

とにもかくにも。

男性は、本当にここの神主らしかった。そして、モコの父親ではなかった。心底ほっとした。

彼は、モコの叔父　つまり母親の弟らしい。言われてみれば、尖った目元がモコと似ている、気がする。

神主さんは、煙草をくわえ、マツチを擦りながら僕の視線に気づき、

「どうかしたかな?」

軽く首を傾げた。僕は慌ててかぶりを振る。

「んで、あんた何しにきたんだっけ？」

モコが机上で組んだ脚を、大開きして組み直す。スカートでなくジャージだから目のやり場に困らないとは言え、とりあえず僕は目をそらした。

「モコが、力を貸してくれるって言うから来たんだけど」

「あーあー、そんな話したね」

くるりと振り返り、モコはソファのへりにひじを付いた。

「ねー九ちゃん。どう思う、こいつ見て」

九ちゃん、と呼ばれた神主さんは、赤々と火の灯った煙草を口から離し、たつぷり煙を吐いて、目を細めた。

「大物連れてきたね、モコちゃん」

「へへ」嬉しそうに笑うモコ。

「彼氏くん」僕を見る神主さん。

「彼氏ではないです」強めに僕。

「君の力を貸してくれないかな」

「……え、僕が逆に？」

「ん？ 逆？」

「いや、僕、力貸してもらえって聞いて来たんですが」

「うん、貸すよ。貸す代わりに、君にも貸して欲しい。ギブアンドテイクだね。……違うな、レンタルアンドレンタルだろうか」

柔らかに微笑むその表情は、喋りながらも全くぶれない。僕を見たまま煙草を一ふかしし、神主さんは言葉を続けた。

「彼氏くんさ」

「彼氏ではないですが」

「君、呪われてるでしょ」

思わず息を飲んだ。

恥ずかしい話。

本当に恥ずかしい話なのだけど、僕は、呪われてる。

「呪われてる」なんて荒唐無稽な言葉、本当はどうしようもなく

使いたくないんだけど、でも実際呪われてるわけで、呪われてる自分を説明するには、呪われてるとしか言いようがない。悔しい。歯痒い。何か他の言い方があるなら誰か教えて欲しい。

奇しくも今日、理科室で三田は言った。呪われたら災いが降りかかる、と。事故にあったり怪我したりする、と。

まさに、まさにそのとおりなのだ。

三田に「お前よく呪われた人の気持ちわかるな」って本当は声を掛けたかったけど、呪われてるなんてバレたら恥ずかしいので踏みとどまった。それにまあ、すんなり信じてもらえないだろうから。ちなみに。

食堂で、モコは僕を「憑かれてる」と言ったけど、あれは五十点だ。

「呪われてるせいで、憑かれやすくなってる」これが百点の解答。僕と僕の母しか知らないこの満点の答えを、神主さんは、あっさり突き付けてきた。何食わぬ笑顔で。

「そのぐらいのことはね、見ればわかるんだよ。私は」

神職だからね、と呟いて、彼はのんびり数本目の煙草を灰皿に押し付ける。

目の前のソファには、モコに代わって神主さんが腰掛けていた。モコはというと、扉の前の空きスペースで何やら念入りにストレッチしていた。

訊かれるままに、僕は自分の身に起こった色々　わざと恥ずかしい言い方をするなら「呪われた半生」　を洗いざらい話した。

彼は、特に口も挟まず、軽い相槌を交えながら、黙々と聞いてくれた。その態度に、逆に不安を覚えてしまう。

「あの」

「ん？」

「呪われてるって、その……変じゃないですか？」

「まさか。むしろ至って一般的じゃないかな、ことこの町において

は」

一般的。一般的？ 神主さんは笑顔で続ける。

「私はね、あ、これは『力を貸してくれないか』って話にも繋がるんだけど　ここだけじゃなくて、この流印町るいんちょうの、ほとんどのお社の神主を勤めてるんだよ」

「ほとんど、ですか」

「その数なんと百八社」

「百八」桁違いだ。

「多忙なんだよ、こう見えて」

はは、と笑いながら、新たな煙草を取り出し、悠々とマツチを擦る。忙しさを感じさせない身のこなし。

「それでね、百八もお社があると　もとい、神様がいると、障らぬ神に障っちゃう人もたくさん出てきてしまうわけだね」

「そういうものなんですか」

「そういうものなんだよ。で、私がお願いしたいのは、君の力でそういう人を……ん、ああ、そろそろ時間か」

ふうと煙を吐きながら彼は壁に掛かった時計を見た。五時ちよつと過ぎ。

がらがらがらつ、と激しい扉の音。振り返る。

灰色の背広。痩せ細った体。

「あ」

声が漏れるのを抑えられなかった。

賽銭箱裏の男が、ひよろりと立っていた。

初めて正面から見たその顔は、風邪を引いた鼠みたいに貧相で、こうやって灯りの下で見ても、その表情は真っ暗だった。

「どうも、ようこそ」

わざとらしいほど爽やかな笑顔で、神主さんが立ち上がった。反射的に僕も立ち上がる。モコは無言でアキレス腱を伸ばしていた。

神主さんは懷から薄い手帳を取り出し、ぺらぺらめくりながら、「えー、ご予約の」

「シメジマです」

口早に遮る中年男性。じめつとした声。ため息程度の音量。

「シメジマさん。それでは、まあ、お座り下さい。あ、彼氏くん、そこ、ちょっと空けてもらっていいかな、ソファ」

「あ、はい」彼氏関連の突っ込みは、一時中断しておく。

事務机のほうにでも行こうと思い、一歩踏み出したとき、

「私どうしても呪いたい相手がいるんです。憎くて憎くて仕方ないんです。妻です。妻が憎くてしょうがないんです。私に、夫に、主人に、優しくないんです。優しくない。妻が。妻なのに。口から出るのは嫌味と不平と愚痴ばかり。あの目あの声あの態度。娘と一緒にあって、娘と一緒に私を馬鹿にするんです。浮気だ。浮気なんです。浮気」シメジマは滝の早さでまくし立てた。「しているかも知れないんです。いや、していると思います。しています。妻は浮気をしています。私より」僕は動くのを忘れていた。「遅くに帰ってくることもあった。化粧が濃くなった。私が寝てからでないと寝ない。憎い。私は妻が憎い。憎いんです。呪い殺したいんです。必死になってお参りしました。祈りました。お願いしました。呪い殺せるでしょうか。呪い殺

たん。

モコが僕の目の前、机の上に飛び乗った。

なびく髪をゆっくりかき上げながら、シメジマを見つめる黄色い目。

「あたし、あんたみたいな奴って、大っ嫌い」

部屋にきんと響く声。揺れる髪。次の瞬間。

ふわっと羽みたく広がった黒髪が、僕の鼻先を微かに撫でていった。

モコは跳んでいた。

風を切る澄んだ音。

続く、鈍い、鈍い、鈍い音。

シメジマの顔に、モコの膝が綺麗に入っていた。

ぐら、と揺れる灰色の背広。ゆっくり沈むように床に倒れていく。  
「さてと」

そんな目の前の光景一切見ずに、神主さんはソファに腰を下ろした。

「このシメジマさんがね、さっき言った『障らぬ神に障っちゃった人』の一例だね」

あっけらかんと神主さんが言う間、モコは倒れたシメジマに馬乗りになり、ありったけの力で往復ビンタを繰り返していた。ぶし、ぶし、と重い音が響く。

「あ、彼氏くん、とりあえず座ったら。うん」

「……はあ」モコをじっと見据えたまま、とりあえず、座る。

「それでね、私とモコちゃんがやってる仕事は、平たく言うと、こういう人から呪いなり祟りなりを被ってあげることなんだけども」

言いながら彼が指差す「こういう人」は今、モコに首を絞められ、人間のじゃないみたいになうなり声を出していた。

ふと、神主さんの言葉に引っかかりを覚える。

「あの、シメジマさんは……呪われてるんですか？」

「ま、それはあとで詳しく話すよ。それはそうと七月くん」

神主さんは柔らかな声で、初めて僕の名前を呼んだ。

「君、ここで私たちと一緒に働きなさい」

「え？」

「それが、君の呪いを落とすことに繋がる。間違いないね」

神主さんは、懷から煙草の箱を取り出し開けた。中を見て「ああ、ないや」と苦笑混じりに呟き、再び僕に目を向ける。モコはシメジマの後頭部を床に何度も打ち付けている。どん、どん、どんと和太鼓みたいな音。神主さんが、小さく咳払いを一つして、

「それにね　まあ、怖がらせたくて言うわけでは、全くないんだけど」

「なんですか」

「君、早くなんとかしなきゃ凄まじい死に方するよ」

蛍光灯が、ちかちかつと明滅した。何かを砕く鈍い音と、苦しげな低いうめき声が聞こえる。シメジマの頭骨が、砕けたのかも知れない。僕は見ない。湯呑みを持ち、さつきモコが飲みかけたお茶を、くいと飲み干す。

さて、どうするか。

どうするか？

「働きます」

自分でも驚くほど即答した。

「うん、ならよかった」

そう呟き、神主さんはようやく、モコとシメジマのほうを見た。

僕も恐る恐る、そっちを向く。

シメジマは、モコに馬乗られ、ぐったりしていた。モコは容赦なく、ごすごす頬をグーで殴り続けている。動かないシメジマは、ただ野良犬みたいになり続ける。モコの長い髪が垂れかかって、表情はよく見えない。

す、とモコが両手でその髪を手早く、頭の後ろで一本に束ね上げた。暗いシメジマの表情がようやく見える。そしてモコの顔も。

ちらつと見えた彼女の目は真っ黄色だった。いや、境内で会ったときからずっと黄色かったけど、今、もうその色は黄色というかほぼ金色で、ちかちか明滅する蛍光灯に合わせ爛々と光っていた。

「お、やっと出るね」

神主さんのその言葉とほぼ同時に、シメジマの口から、もはつと煙が出た。煙草の煙みたいで、ふわふわしたものじゃない。蛸が吐く墨みたいで、ねばねばした重たい黒色。

僕が殺されかけた巨人の煙　ワルイキよりもっとどす黒いそれは、一直線になり、するする宙へ上っていった。そしてそのままモコの口へ、つるつる吸い込まれていく。なんだか黒いうどんをすすってるみたいで、見ていてひどい胸焼けがした。

「う」

束ねていた髪から手を離し、口元を押さえるモコ。ぱらぱら、と



髪がカーテンみたいに、二人の表情を隠していく。

「ごぼ。」

モコから、詰まった排水溝みたいな音が鳴る。

同時に、彼女の体が大きく斜めに傾いた。

「モコ」

思わず寄ろうとした僕を、モコは見もせずにただ手を伸ばして制止し、がらがらに掠れた声を出した。

「……こーら、かってきて」

「コーラ、うん、わかった」

立ち上がる。出て行こうとする僕に、

「まって、ななつき！」モコが掠れた声を振り絞った。

「なに？」

「ぺぶし以外かってきたらなぐる」

「……あ、うん」どんな状況でも、こたわりは大事にすべきだと思う。

「あたし、ほんつとにああいう奴大っ嫌い。いや別にさ、奥さんが優しくしてくれないとか浮気してつかもとか、だから腹立つ殺してやりたいとか、そーゆーのはいいと思うの別に自由だし。でもさ、でもだからって呪うとかマジばかじゃねーのって思うの。言いたいことあんなら言やいいじゃん面と向かって。言えないからって神頼みなの？ なにそれすっげえバカみたい。ほんつとああいうウジウジしたの、あたしほんつとに、ほんつとに」

「はいはい。モコちゃん、わかったから、今は休みなさい」

ソファの上に横になり、苦しげにわめき散らすモコの頭を、神主さんはそつと撫でた。

モコは、うつつ、と濡れた犬みたいに鳴いて、ソファの背に顔を押し付け、おとなしく黙った。僕が買ってきたコーラをしっかりと抱き締めていたのが、なんだか少し嬉しかった。

「さて、彼氏くん」

神主さんは事務机に腰掛け、ゆったり足を組む。笑顔で首を傾げ、  
「なんの話してたんだっけ？」

「……とりあえず、僕、ここで働かせてもらいます、っていう話を」

「そうだそうだ。うん、よろしくね」

「はあ、よろしくお願いします」

はたして僕は仕事として何をさせられるのか、全然説明されてないのが不安だけど、やると決めたからにはとりあえず、やってみよう、だって凄まじい死に方なんてしたくないし。などなど、ぐるぐる考えながら、床でのびているシメジマ氏の顔に消毒用の脱脂綿を擦りつける（神主さんいわく「アフターサービス」）。でも、あれだけ派手にやられたのに、シメジマの顔には傷一つ、腫れ一つ、碎けた部分一つなかった。それがなんだか逆に怖かった。

「あ」

「どうかしたかい」

「いや、あの」

シメジマ氏のだらしなく開いた口元を見ていて、思い出した。事務机に座る神主さんを見上げる。

「あの、僕の目、何色ですか」

「ん？」

細く笑っていた目をくるっと大きく開いて、神主さんが僕を見つめる。

「黒だよ。今は」

「今は、ってことは」

「うん、黄色かったよ、さっきは。まあ、そりゃあそうなるさ、だって」

神主さんはゆっくりと、長机の上の湯呑みを指差す。

「飲んだでしょ？ モコちゃんの飲みかけ」

「え」

「あ、言い方変えようか。間接キスしたでしょ？ モコちゃん  
と。はは、うん、これはいい」

神主さんは、無邪気にくすくす笑う。横になっているモコが、鬱陶しげに髪をくしゃくしゃした。

要するに、そういうことらしい。

桜の木が倒れたとき、僕はモコの飲みかけのコーラを飲んだ。さつきは、お茶を飲んだ。  
つまり。

モコが口に付けたものを飲んだり食べたりすると、見えないものが見えるようになる。目が黄色くなる。神主さんいわく、「風邪がうつるようなもの」だとか。なるほど、と思ったけど、その言い方だとなんだか被害を被ってるみたいで、ちよつとしつくりこなかった。僕としては「おすそわけ」されてるような感覚だったから。目玉焼きの、おすそわけ。

「じゃあ、明日からよろしくね。今日はとりあえず、もう帰りなさい。一応、神職として忠告しておくけど、君みたいな『寄せ付けちゃう』体質の人は、日が暮れたら外に出ないほうが懸命だよ。死ぬかも知れないんだから」

怖いことを笑顔でさくつと言う神主さん。

大人しく忠告に従うことにし、そそくさと立ち上がる。それに合わせて、神主さんが事務机から、すたつと降りた。

「少し送って行こうか。煙草買いに行くから、ついでにね」

「あ、はい」

「モコちゃん、起きてる？」

僕らに背を向けたまま、モコが微かに動いた。

「……なに？」

「もしシメジマさんが起きたら、七万五千円、もらっておいてね。あ、領収書が必要って言われたら、私の机の中に入ってるから」

「りよおかい」

「しかし、人をボコボコにしてお金もらえるんだから、楽しい商売だよな」

涼しげに笑う神主さん。それを見て、今日一番ぐらいぞつとした。

「彼氏くんさ、この神社、千歩狗神社が何の神社かは知ってるかな」  
夜みたいに暗かった空は、もう本当に夜になっていた。

神主さんと僕は、境内から参拝口までの長い長い石段を、並んでゆつくり下りていた。柔らかい風が吹き、周りの林が静かに鳴る。

「えっと、呪いの神社、ですか」

「はは、うん。それ、よく言われるんだけどね、実はちょっと違うんだな。ここは『恨』の神様を祀ってる神社。わかるかな、コン」  
「いえ、わからないです」

「恨はつまり、自分の気に入らない人をうらむ心。煩惱の一つなんだけど、シメジマさんはすっかりコンに取り込まれてたわけだね。呪われた、というよりは祟られたんだな、うちの神様に」

うちの神様、という言い方に、なんだか只ならぬ神聖さを感じた。神主さんは、足取り軽く石段を下り下り、僕に笑顔を向ける。

「工作上、呪いも祟りも一緒くたに処理してるんだけど、この二つは似てるようで全然違う。違い、わかるかい？」

「……祟りは、神様とかから受けるもので、呪いは、その」

少しだけ口ごもる僕を、神主さんは立ち止まり、静かに見つめた。僕は慎重に言葉を続ける。

「呪いは、人から受けるもの、だと思います」

「うん、正解。だから君も」  
ざざ、と木々が波みたいにざわめく。

「君も、誰かに、呪いをかけられたんだよね？」

誰かに、呪いを、かけられた。

僕は小さく頷いた。

それを見て、神主さんが静かに言葉を進めていく。

「自分を呪った相手が誰か、知ってるのかな」  
「知ってます」

「うん、そうか。それは、今は言いにくい？」

「……まあ、はい、ちよつと」

「うん、プライベートなことだしね。ま、言いたくなったら話してもらえると、助かるかな。君の力になるためにも」

「……はい」

神主さんは、ふわりと微笑み、「ああ、そうだ」と呟いた。

「君には教えておくけど、モコちゃんもなんだ」

「え？」

「モコちゃんも、呪われてるんだよ」

声も出せなかった。僕はただ黙って、少し頷いた。

「ただ、彼女が君と違うのは、自分が誰に呪いをかけられたのか、知らないこと。というより 彼女は、自分が呪われてるってこと自体、知らない」

「それは……教えてあげないんですか」

神主さんは薄く微笑み、くるり背を向け、のんびりと石段を下りだした。かつ、かつ、と澄んだ音が夜に響く。

「深い呪いっていうのはね、自分で考えて、自分で見つけて、自分の力で打ち碎かなきゃ抜えないんだよ。だから君も、自分で考えて自分で見つけて、自分の力でなんとかしなさい。私は、そのための道を、少し用意してあげるだけ。覚えといてね」

「……はい」闇に同化しかけている黒いスーツの背中を、じつと見つめながら返事をした。

それから、無言だった。風と木々と靴の音を聞きながら、ただ下り続けた。行きに一人で上ったときより、少しだけ長く感じた。

石段が終わり、参拝口の真っ白い大鳥居をくぐったところで、神主さんが口を開いた。

「モコちゃんは君に出会って、君を連れてきた。それには何か意味があると思う。君にとっても、モコちゃんにとっても、もしかした

ら、私にとつても。……というわけで、改めてよろしくね、彼氏くん」

「彼氏では、ないです」

あはは、と明るく笑って、神主さんは僕に向かって片手を伸ばした。そろそろと僕はその手を握り返す。思っていたよりも暖かい感触。うつすら月と街灯の光が落ちた彼の顔は、ほのかに白くておぼろげで、この上なく神職らしく見えた。

じっくり見るとモコのに似ているその口が、にこりと笑みを携えたまま、ゆっくり開く。

「十三矢九介きゅうすけです。あ、私の名前ね。ま、九ちゃんとか、適当に呼んでくれていいよ。それか」

細めていた目をくりつと開き、

「お義父さん、と呼んでもらえれば、感無量だけど」

悪戯っぽく歯を見せて、神主さんは笑った。

#### 4 桃の缶詰は開かない

朝。学校が始まる、一時間以上前。

僕は、千歩狗神社の事務所にいた。

「おはよう。なんだか朝早くから来てもらって悪いね」

ソファに腰掛け、柔和な表情を浮かべる神主さん。

昨日と同じ、上下黒スーツに赤ネクタイ。そして、昨日と同じ貼り付いたような笑顔。

「じゃあ早速、初仕事、お願いするね。まあ、簡単なことだから心配しなくていいよ」

その言葉が逆に不安を煽る。無意識に、シャツの裾を強く握り締めていた。

「『あれ』を使つて、やれる限りのことをやって欲しい。これだけで、わかるよね？ 彼氏くん」

す、と神主さんが、的を射るように僕の後方を指差す。怖かった。

彼が指差す方向を見るのが、怖かった。

簡単なこと？ やれる限りのこと？

ぐつぐつ湧き上がる不安を懸命に抑えながら、おそる、おそる。振り向いた。

「……え？」

壁に立てかけられた、竹ぼうき一本。

「すっ」

「あむ」

「んっ」

陽射しがぎらぎら照り返す境内。

モコは、金魚みたいに口をぱくぱくしながら、四方八方の空気を、吸っては吐き吸っては吐きしていた。その手には、昨日、僕が買っ

てきたコーラがぶらぶら揺れている。完全に炭酸抜けてるな、あれ。ざつ、ざつ、と竹ぼうきを使ってやれる『簡単なこと』を、『やれる限り』やりながら、モコに尋ねる。

「さっきから何やってるの」

「そーじ」

「掃除？ それは今、僕が」

「ちがうちがう。あたしにしか出来ねー掃除。ワルイキ吸ってんのであるほど。呪いの神社の異名を持つただけあって、ここは悪い気が相当蔓延してるらしい。僕には当然、全然見えないけど。」

「あー！」

モコが僕を見て、突如、コーラをごくごくやり始める。

「え？」

と発した瞬間、モコは僕に向けて口からぶふうつと霧を噴射した。ワイシャツが一瞬で茶まだらになる。

「うわ、え、え、なに」

「ワルイキがあんたにまとわりついてたから、追い払った」

「……あ、そう」にしても何か他にやり方あるだろうに。

「ごめんびつくりした？ お詫びにこれやる」

はい、とモコは、コーラに付いていたおまけを差し出した。

台に乗った小さな車のフィギュア。車種は軽トラック。台座には「世界の名車シリーズ全十種」という刻印。そのカテゴリでなぜよりによって軽トラをエントリーさせたのか、製作者の意図がいまいち解せない。

「ほらほら。軽トラだよ、あんたの好きな」

「えと、いらない。好きでもない」

「あそ、あたしもいらない。でさ七月」

「うん」

「あたしのほう、もう掃除終わったよ」

辺りを見回す。ご神木から散った真緑の葉が散乱している石畳。  
「ごめん僕のほうは、まだ」



「まったく、とろいなー。そんなだからあたしの気持ちにも気付かねーのよ」

「……え、なにその急に意味深な」

「スキナノニー」

「うわ棒読みだ」

「ほんとに、好きなのに」

「うわ……わ……ん、えと」

見たこともない、女の子の子した表情のモコ。

から、一瞬でいつものモコに戻る。

「ぶ。んへへ、あーおもしれ七月」

そして、くすくす笑いながら賽銭箱に乗っかり、どすんとあぐらをかいた。冗談だとわかっていながら少し汗ばんでしまった自分。もう少し、からかわれ慣れようと心に決める。

モコはそんな僕の気を知る由もなく、というかもはや僕に興味もなく、ふわあとあくびしながら賽銭箱の上で横になっていた。まさに神をも恐れぬ、というか。

「あのさモコ」

「なんだよお」

「今さら気付いたんだけど……ここの賽銭箱、大きくない？　なんか、お社のサイズに反して」

「これ、九ちゃんの意向。あの人、金の亡者だよ」

賽銭箱が大きければお賽銭が増えるというわけでもないだろうに。のんびり気持ちよさそうに目を瞑るモコを傍目に、掃除を続ける。風が吹き、集めた葉が少し舞い、お社を覆うお札たちが一斉に、ぺらぺら小さく捲れた。

ぼとり、と。

小さなお札が一枚剥がれ落ちた。葉っぱに加えてお札にまで散られると困る。慌てて近寄り、拾い上げた。

『四年二組　おおみなももこ』。

うつすら黒く、そう書いてあった。小さく整った、習字のお手本

のような字。裏には安全ピン。これは、お札じゃなくて名札。

「そこ、邪魔だからどいてくれませんか」

細くて鋭い、針のような声がした。咄嗟に声のほうを見る。

お社の角、柱の陰に、背の低い少女が佇んでいた。

黒い半袖ワンピース。白くて細い腕と脚。肩まで伸びた髪は真っ黒で、ほっそりした顔は真っ白。

まるでオセロみたいな女の子だった。

「邪魔です」

あどけない見た目と裏腹に、凜とした声。女の子は、僕のまん前へてくてく歩いてきた。

「邪魔なんですけど」

「あ、ごめん」慌てて脇へ退く。

少女は流れるように、からから鈴を振り、ぱんぱん拍手を打った。その間も、モコは賽銭箱の上に寝転がったままで、なんだかモコが拝まれてるみたいに見えた。

手を合わせ、じつと頭を下げたままの女の子。その姿に、昨日のシメジマさんの姿が被り、はっとした。恐る恐る、声をかける。

「あのさ、えと……ここ、あんまりお参りしないほうがいいかも知れないよ」

じわつとめんどくさそうに頭を上げる女の子。目が合う。

「なんですか」

「えと、なんて言ったらいいのかな……あんまり良くない神様がいるんだよ、ここ」

「なんの神様ですか」

恨を司こんつてる、なんて言ってもわけわかんないよなと思い、ちょっと説明を噛み砕く。

「ええと、呪い、って知ってるかな」

「知ってます」

「あ、知ってるんだ。ここ、その呪いの神様、みたいな神様がいて」

「知ってます」

「あ、知ってるんだ」

「ね、お嬢ちゃん。あんた、誰か呪いにきたの？」

「寶錢箱に寝たまま、モコが声をかけた。」

「そうです」

「へー。誰よ？」

「お母さんです」

「そりやまたどうして」

「……死んじゃえはいって、思って」

女の子は、そう呟いた。パンチのある発言に、僕は少し目の前がちかちかした。

「なるほー。んで、今日初めて来たの？」

対するモコは、どうともない様子でからつと少女に尋ねる。

「三日前から、毎日来てます」

「あはは、熱心でいいじゃん。で、効果出た？ 呪い」

「……それなりです」

「それなりってどれなりよ」

「入院してます、事故で」

僕は無言で衝撃を受けた。

「えーマジで？ じゃ効き目あるんだここ。知らなかった」

自分とこの神社じゃないのか、と言いたくなるのを抑える。

「でもさー、入院ってだけで、まだ死んではないんでしょ？」

「……まあ、はい」

「それってあれじゃねーの。お嬢ちゃんの……お嬢ちゃんなんて名前？」

「桃子ももこです」

「お！ あたしモコっていうの。すげー近いね、へへ」

モコは起き上がって寶錢箱から飛び降り、少女に近寄ると、髪をわしゃわしゃ撫でた。少女 桃子ちゃんは、居心地悪げに体をよじり、顔をしかめていた。

「よし桃子、これもなんかの縁ってことで、はいプレゼント」

さっきの軽トラを取り出すモコ。どうしても誰かにあげたいらしい。

「……いらないます」怯えたような声。

「そー言わずに、ほれ」ぐい、と桃子ちゃんの体に押し付ける。  
ぱんつ。乾いた音。

桃子ちゃんが、モコの手を払っていた。

僕の頭の横をかすめ、ご神木の根元まで軽トラがすっ飛ぶ。

「ありゃ」払われた方の手で髪をくしゃ、とやるモコ。

「あ……すいません」

「いや、いいけどね、別いらねーし」

ちらつと軽トラのおもちゃを一瞥して、モコは言葉を続けた。

「でだ、桃子。効果が出ないのはお前の、念か、力が足りなんだよ」

「なんですか、それ」

「念てのは恨みの量。怨念。わかるか？ おんねん」

モコは言いながら、桃子ちゃんの鼻先を指で軽く押す。

「よく、わからないです」顔を振り、指を振り払う桃子ちゃん。

「つまりお前、毎日こうして呪いに来ながら、ホントは殺したいとか、そこまで本気で思ってるんじゃないかねーのってこと」

「……そんなことないです」

桃子ちゃんは目を伏せた。ありていな例えだけどフランス人形みたいなまつげが、目の下に薄く影を作っていた。

「なら足りないのは純粹に力だ。霊力。靈感。霊能力。幽霊とか見たことある？桃子」にやにやしながらモコが訊く。

「……幽霊ですか？」

「そ、ゆーれい。おばけ。うらめしや」

桃子ちゃんは口をつぐみ、意図がわからないという目でじっとモコを見て、

「というか、お姉さんたちは何しに来たんですか？」

「あ、あたし、ここの巫女なの。神様に仕える女。どう、すげーだ

る」

胸を張るモコ。訝しげな桃子ちゃん。

「で、そっちは彼氏。あたしに仕える男。どう、いまいちだろ」

「……えっと、彼氏ではなくて、仕えてもなくて、いまいちって言うのは地味に傷ついた。うん」感じたことを素直に言ってみた。

「それはそうと桃子、手伝ってやるつか、呪うの。……あたし、こう見えて結構あるのよ靈感。なにせ魔女だから」

へへ、と笑うモコ。僕は混乱した。人を呪うなんて大嫌いとか、シメジマさんに言ってたのに。

桃子ちゃんは眉間に小さく皺を寄せて、

「なんですかその嘘。魔女とか、すごく嘘っぽい」

「嘘じゃねーんだなこれが」

「じゃあ証明してください」

「あーいいともさ。よく見てろよ」

証明、というなんだか子供らしい要求を受け、バキバキ手の指を鳴らしながらモコは周りを見て、

「うし、あれでいつか」と、ご神木へ歩み寄った。

そして、おもむろに右腕を伸ばし、灰茶けた幹に手のひらを押し当てる。

すつ、と深く息を吸う音。

直後。

「わ」

桃子ちゃんと僕は、綺麗にハモった。

むくむく、ぽっぽつと、音こそしないけど、まさにそんな風に、木の枝先につぼみが付いて、すぐ花になっていく。いくつも、いくつも、いくつも。こんなの見れば誰でもハモる。

呆然と眺めること、数十秒。

柔らかに咲く満開の桜と、夏みたいに突き抜ける五月晴れという、ちぐはぐな光景が出来上がった。

「……モコ、こんなこと出来たの」

「うん、巫女だし」

「魔女って言ってたじゃんさっき」

「仕事は巫女、アフターファイブは魔女」

「午前八時だけどね今。いや、てか、何をどうやったのこれ」

「あんたに黄色い目あげるのと一緒によ」

「……えと、ごめん、よくわからない」

「ワルイキ吸って腹に溜まってた力を、ぐぐぐって手を伝って木に分けてやったの。そんだけ」

「そんだけ、と言われても、そんだけ感が僕には全然湧かない。

呆然としている桃子ちゃんに、モコがバシツと指を差す。

「見たか桃子。あたしの魔女っぷり。霊力全開っぷり」

「……見ました」素直に頷く桃子ちゃん。

「つーわけで、あたしが力貸したげる」

昨日、同じようなことを食堂で言われたのを思い出す。僕に貸してもまだ貸せるぐらい、モコは力に溢れてるらしい。

「でも貸すってどうするの、モコ」

「桃子のお袋をあたしが呪う」

モコは真顔でVサインを掲げた。

「……でもお姉さん、私のお母さん知らないじゃないですか」

「あたしは見ず知らずの奴でも呪える。呪い殺せる」

もう片方の手でもVサインを出すモコ。蟹みただけで顔は至って真剣だ。

「さ、どうする桃子。半信半疑ならこの七月を呪って実演してやるけど」

「はは、冗談でもやめてモコ」

「あの、信じます、けど」

そう言って桃子ちゃんは俯き、黙り込んだ。

桜の花びらが、ほんの数枚、ちらちら舞い落ちる。

しばらく桃子ちゃんを見ていたモコは、ふうと一息つき、

「ま、いいや。とりあえず放課後にしよ。あたし、さっきので疲れ

ちゃったし。それに呪うにはそれ相応の準備もいるしさ。だから夕方、またおいで桃子」

と、微笑んだ。桃子ちゃんは、黙ったままだった。

「おし、学校行こ七月。遅刻すんぞそろそろ」

「へ、あ、うん」

ご神木の根元に置いた鞆を、モコがぱいと僕に投げる。キャッチし損なって落としてしゃがんで拾っていたら、モコに腕を掴まれる。

ずんずんと引つ張られ、境内を後にした。いつもこうして腕引つ張られてるな僕と、ぼんやり思った。

石段を降りながら振り返る。強い風。舞い散る桜吹雪と緑の葉。その中で静かに佇む桃子ちゃんの姿が、ゆっくり視界の隅から消えていった。

昼休み。久々にモコからの誘いがなく、三田と一緒に昼食をとった。

「あのさ七月、さっきお前、なんでカレーに顔突っ込んだんだ急に」  
「……なんだろう、ダイレクトに、カレーを感じてみたくて」

とか喋りながら教室に戻ると、僕の机に藁がどっさり積んであった。

「藁だな」三田が言う。

「藁だね」僕も言う。

「七月、ちよつともらっていいか」

「え、うん」

三田はむんずと藁を一掴みして自席に戻り、机の上に丁寧に敷いて、その上に突っ伏し寝始めた。三田のこういう動じない性格が僕は結構好きで、だから中学の頃から長く付き合ってるんだと思う。

で、とりあえず僕は、藁には触れず椅子に座った。座ってみてわかったけど、藁の積まれ具合はたっぷり鼻先まであった。馬の餌みたいな量。動物園みたいな匂い。

「七月くん、おかえり。なに食べた？」

前の席に座る一ノ瀬さんが、ひよっこり藁の陰から顔を出した。

「えっと、カレーだよ」

「わー、いいなあ。なんだかお腹減ってきた」

「食べてないの？」

「食べたよー。おむすび一個」

「え、また？ 一ノ瀬さん、いつもおむすび一個じゃない？」

「うーん、ダイエットなの」

えへへ、と笑いながら、一ノ瀬さんはちりちりと胸元の鈴を揺らした。その音色が藁とマッチして否が応にも牧場を連想させる。

「あ、それでね七月くん、この藁んだけどね、持ってきた子からお手紙受け取ってるの。これ。はい」

一ノ瀬さんはふわふわした笑顔で、僕にノートの切れ端を差し出した。

『藁人形百個放課後までに』。

細やかで整っていて、でもなんだか有無を言わさない迫力のある字。

「ねね、七月くん、お手紙なんて書いてあったの？」

「えと、なんか、注文」

「へえ！ なんだか面白そうだねー」

ころころと弾むような笑顔。ここだけの話、僕は一ノ瀬さんのこの笑顔に日頃とても癒されている。自分が呪われてるなんて少しだけ忘れられる、このほんわか感。

「あ、ね、七月くん。お手紙と藁、持って来た子、誰かわかってるのかな？ もしかして」

「まあ、大体。髪長かった？」

「凄く長くてさらさらで綺麗だった！」

「あ、そか、やっぱり」

「すごいね、以心伝心だね！ よく七月くんに会いに来るもんね。ね、なにさんっていうの？」



「十三矢さん。E組の、先月入った転入生で」

「十三矢さんだね、覚えた！あのね、私ずっと思ってたんだけどね、近くで見たらなおさら、目が大きくてぱっちりで、肌真っ白で声まで綺麗で、わあ美人だなあって、つい見とれちゃったよー」

「そっかあ」本人に伝えたら喜ぶだろうか。

「お友達になりたいなあ、私。なんて、えへへ」

照れくさそうにはにかむ一ノ瀬さん。

「うん、いいと思う」

口から自然とその言葉が出た。

思えば、モコが女の子と一緒にいるところなんて見たことがない。というか、僕以外の誰かと一緒にいるところ自体見たことがない。

友達。

余計なおせっかいかも知れないけど、モコと一ノ瀬さんが友達になったところ、見てみたいかと、心から思った。

で、藁の話。

僕は昼休みの残りと授業時間、がつつり藁人形作りに励んだ。作り方なんて知らなかったので結構思うままにやってみただけで意外とちゃんと出来てしまった。才能があるのかも知れない。

ちなみに、一ノ瀬さんが「私も手伝いたい！」と率先して作業を下請けてくれたので、百個のノルマは難なく達成出来た。ついでに言うとな僕が作った藁人形を「ここはもつとふくらませたほうが可愛いよー」とか言いながら全部手直ししてくれた。ので、思いがけず百体全部、一ノ瀬先生の作品と相成ってしまった。匠だ。

そして放課後。

モコは新聞片手に賽銭箱に座り、コーラを飲み飲み指示を出した。僕は指示通り境内を走り回り、時にはとんとん釘を打ち、藁人形を設置した。モコいわく「ただの雰囲気作り」だそうだ。にしては凝り過ぎだと思う。

「てかさモコ、その新聞、どうしたの」

「図書室から借りてきた。昼休み」

「なんでまた」

「ちよつとね。気になることがあつたつーか」

大きく立膝をついて新聞を広げるモコ。わしゃつと乱雑に捲れるスカート。反射的にすぐ目をそらす僕。

「それより七月」ちよいちよい、とモコが手招きする。

「なに？」ある程度目をそらしながら近づく。と、素早くコーラを口に含むモコ。よぎるデジャブ。逃げようとする。

ぶふうふうつつ、と今日二度目。

甘い匂いのする霧を、思いっきり被った。

「……また、ワルイキ？」

「いや今はいないけど、いちお予防って感じで。モコちゃん特製虫除けスプレー」

「……あ、そ」

大体そういうスプレーはさらさら感が大事なわけだけど、僕べつたべただ。

そうこうしながら、夕日が色濃く染まってきた頃、準備は終わった。

朝咲いて未だ爛々と咲き続けている桜の幹、狛犬の口の中、手を洗う所（手水舎<sup>てみづぐさ</sup>）と言つらしいの柄杓の中、そしてお社の周囲に、ずらりと打ち付けられ、置かれ、並んだ藁人形。もう誰がどう見ても呪いの神社という風貌。

「あの」

石段の方から、ほっそりした声。振り向く。

桃子ちゃんが、静かに立っていた。顔が少し、朝より青白い。

モコは彼女を見つけるや、手をぶんぶん振り大声を上げた。

「おう桃子！ さつそく始めよ！。あたしもう、呪いたくて呪いたくてウズウズしてんだから」

桃子ちゃんは何も言わず、力ない足取りで僕らの傍へ歩いてきた。モコは構わず大声で喋り続ける。

「すげーだろ桃子。お前のために藁人形作って飾りまくったんだよ、あたし」

作ったのも飾ったのも、僕だけど、うん。

「あの、お姉さん……あの……ごめんなさい」

桃子ちゃんは、消え入りそうな声で呟いた。モコは何の反応もせず、賽銭箱から素早く飛び降りた。

「まず練習。見てる桃子」

近くの藁人形を一つ拾い上げ、大きく息を吸って目を瞑り、そつとその顔に、唇を付けた。

キスだ、とぼんやり思った。

たくさんの藁人形に囲まれながら藁人形に口付けるその光景は、なんだか異様で、見てはいけないもののような気がして、でもなぜか引きつけられるように、目を離すことが出来なかった。

す、と口を離し、モコが目を開ける。

「桃子、この腕、ちょっとひねってみ」そう言って人形を差し出す。

「え……」

「ほら」

怯えたような表情を浮かべ、桃子ちゃんは手を出ししぶった。

「じゃ、あたしがやつちやお。えい」

ぐに、とモコが藁人形の右腕を指でつまみ、捻り上げた。それと連動して。

「いたっ！ いたたたっ！」

僕の喉から、自分でも引くぐらいの大声が出た。

右腕が雑巾みたいに、思いつきり絞り上げられる。曲がっちゃいけないベクトルに腕がねじれる感覚と激痛。

「へへ、成功つと」

「お、あ、モコ、お前、それ」

「お？ 七月、お前なんて口利いていいの？ あ？」

にんまりしながら、モコが再び人形の腕に指を掛ける。

「ごめん、ごめんなさい」

「へへ。よし、じゃこれは七月自分で持ってた」

ぽい、と人形を放り投げるモコ。驚異的な俊敏さでキャッチする僕。

「そんじゃ次、本番」

すぐ傍の狛犬の口に咥えさせてあつた藁人形を掴んで取り出し、モコは目を閉じた。そして、唇を静かに押し当てる。

さつきより、ずっとずっと長い口付けだった。

その間、桃子ちゃんは、モコの制服の裾を何度も弱々しく引つ張っていた。でもモコは全く、反応を返さなかった。

ただ無言で、何分も過ぎて、モコがゆっくり口を離し、笑う。ぎらぎら光る黄色い目。

おもむろに、モコは藁人形の頭の先を摘んだ。

あ、と桃子ちゃんが小さく声を上げる。

上に引つ張られ、少しずつ藁人形の首が伸びていく。瞬く間。

ぶちん。藁くずが宙を舞う。

人形の首が引き千切れ、ガラスが割れるような音が響いた。桃子ちゃんの叫び声だった。言葉にならない声、音。耳の奥が、きーんとした。

直後。

がつ、と狛犬の頭が、石畳に転げ落ちた。

モコはそれを見て、

「呪う相手、間違っちった」

静かに呟いた。

静寂。

モコはゆっくり屈んで、ひく、ひく、と不規則に喉を鳴らす桃子ちゃんに、顔の高さを合わせた。

「覚えといて。人のこと呪い殺したいなんて考えるウジウジしたバカ野郎、あたし、死ぬほど大っ嫌いなんだ。……神様ってのはね、そんなくだらない願い聞かために、いるんじゃないよ」

シメジマさんのときと同じ、いや、それよりもっと鋭く尖った金色の目で、少女を睨んでいた。

「ごめんなさい。か細くて、掠れた声で、でもはつきりと、桃子ちゃんと言った。それから、何度も何度も、ごめんなさいを繰り返した。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

桃子ちゃんが、おそらくきつと百以上のごめんなさいを吐き出した頃、モコは静かに立ち上がった。

立ち上がり、少女の小さな背中中に手を回し、とす、と自分の体へ引き寄せた。

桃子ちゃんはモコのおなかに顔を埋めて、震えるみたいに泣いた。「殺したいって思ったことは、あたしは別にいいと思う。思うだけじゃなくて本当に殺したって、あたしは何も言わない。でも、神様なんかに頼るな。自分のことなら自分で進め。……で、やんのか？」

桃子」

桃子ちゃんは首を振った。強く。

「ん、そうか、わかった。……じゃ、おせつきよおしまい」

モコは目を細め、桃子ちゃんの頭をわしわし撫でた。

「あのさ桃子。これからは、寂しいときは、お姉ちゃんたちが遊んでやるよ」

桃子ちゃんが顔を上げた。真っ赤な目で、モコを心細げに見上げる。

「ほら、そんな目すんな。ほんとだから。てか七月もなんか言えよ」

「え、あ、うん。いや、本当に。寂しくなったら僕らは全然いつでも、うん。大丈夫だから」

正直、僕には桃子ちゃんの抱える事情がわからず、たどたどしい言葉しか出なかったけど、桃子ちゃんは嬉しそうに微笑んでくれた。どこか大人びた子だとずっと思ってたけど、その笑顔は、はっとするほど子供だった。

「よし、じゃあ桃子。とりあえず、謝らなきゃいけない人んとこ、

行つてこい。今すぐ」

「……はい。ごめんなさい」

「あたしにごめんなさいはいいよ。いらない。しっかり謝つて、しっかりやることやつたら、またおいで。いいね」

くしゃくしゃつと強く、モコが桃子ちゃんの髪を撫でた。それをすぐつたげに受け、桃子ちゃんは「はい」と強く頷いた。

そして、消えた。

氷が溶けるみたいに、煙が空気に混ざるみたいに、消えた。

消えたつて言葉はとんでもなく安易だけど、でも消えたんだから消えたとしか言えなくて、言葉はいつも無力だと思った。

だから結局、僕の口から出たのは、

「わ、消えた」

「わ、芸のないリアクション」

モコは小さく笑つて、ご神木に近寄り、幹にもたれながらぺたん  
と座つた。

「……あの、モコ。桃子ちゃんは」

「消えたよ。自分で言つてたじゃんか」

「いや、そうじゃなくて。え、桃子ちゃんつて」

「おばけ」

見ちゃつた。

見ちゃつたどころか会話しちゃつたどころか少し仲良くなつちやつた。いやでも。

「なんで見えたんだよ、僕」

モコは座つたまま、胸ポケットからピンクの手鏡を出して、僕に  
向けた。

「ご対面」

鏡を覗き込む僕の目は、綺麗な丸い目玉焼き。

「え、え、なんで」

「あたしのコーラスプレー、吸つたからじゃねーの」  
やっぱりコーラは油断ならない。そう思った。

ご神木の根元に転がっていた軽トラのおもちゃ　桃子ちゃんが今朝、払い飛ばしたそれを、モコは拾ってじっと見ていた。

冷たい風が吹く。モコの髪がなびいて揺れた。

桜の花びらがひらひら落ちて、モコの頬にびったり、貼り付いた。泣いていた。

黄色い目からぼろぼろ大きな粒を零しながら、モコはおもちゃを見ていた。声も出さず、拭いもせず、ただじっと、見つめ続けた。

高橋桃子。

それが桃子ちゃんの名前だった。

モコが図書室から借りてきた新聞、ほんの三日前の朝刊に、その名前はあった。軽トラックに轢かれて小学生の女の子が事故死した、という小さな小さな記事だった。

あまりに突然の別れで、孤独で、寂しくて、お母さんのことが大好きで、だから一緒にいて欲しくて、でも死んで欲しくなくなかって、殺したくなくなかって。行き場のない桃子ちゃんは、ただ、神様に祈った。

そういう話だよ、とモコは言った。

陽は沈み、静かな夜だった。

僕らは、もう何時間も、並んでご神木の根元に座っていた。

モコは、藁人形に気を吹き込んだことで相当消耗していたらしく、ぼつりぼつりと喋っては、時折俯いて、小さく呼吸を整えていた。モコがどのくらい力を使って、どのくらい自分の体を削ったのかなんて全くわからなかったけど、ただ、そのゆっくりした時間は、なんだか僕には心地よかった。

「七月ってさ、自分の親、好き？」

月が少し高く上がった頃、モコは宙を見ながら、そう訊いた。少しだけ言葉に詰まりながら、

「うん。好きだよ」

と答える。モコはそっか、と小さく呟いて、

「あたしさ、親いないんだ」

なんでもないことのように言った。

何も言えなかった。

すぐにモコは僕を見て、へへ、と目を細め笑う。

「なに辛気くせー顔してんの七月」

「え、いや」

「違うの別に。辛気くさい話がしたいんじゃないでさ。わかんねーのよ、あたし、あんまり。家族の……なんていうのかなあ、好きとか、そういう感じ」

こんなとき。

こんなとき、どうすればいいのか全然わからなくて、全然考えられなくて、どうもしないのがいいのか、何も考えないのがいいのか、そんなこともわからなくて、僕はぐるぐる馬鹿みたいに頭を回転させながら、ただ黙って頷いた。

「あんま気にしないで、てきとーに聞いて欲しいんだけどさ」

「うん」

「あたしさ、母さん、あたしが十歳くらいするときかなあ、出てっちゃって」

「うん」

「父さんは、生まれたときからいなくてさ」

「うん」絶対に、言葉に詰まらないように。

「母さん出てっってから、ばあちゃんところで暮らしてたんだけど、ばあちゃん死んじやって、で、越してきたんだけどね。九ちゃんちに」

「うん」今は考えるな、と自分に言い聞かせた。

それからモコは、ふうと小さく息をついて、僕を見た。

「だからあたし、ちよつと桃子のこと羨ましかったっつーか……死んだ子のこと羨ましいなんて、不謹慎か」

ふふ、と笑いながら、両手を高く伸ばして、モコは気持ちよさそうに大きく背伸びをした。



伸びるその手が、僕から見て月とちょうどぴったり重なって、そしてモコはその手をぐっと力強く握り締めて、ああ、モコは月を掴みたかったんだ、とぼんやり思った。

「七月、呪われてんだよね」

帰り際。

石段を降りきって、白い鳥居をくぐったとき。それまでずっと黙っていたモコが、さらっと言った。

あまりに急だったので、何も言えずにいと、

「この鳥居、真っ白でしょ？ でもね、昔、黒かったんだ。あたしがすげーちっちゃい頃」

モコは白い鳥居に手を付いて、ぺたぺたと触ってみせた。

「母さんがね　その頃は母さんいたんだけど　鳥居様は、この神社に来る人たちの「恨」を、吸い取って下さってるんだよって言うてた。呪いを防ぐために。……で結局、自分が真っ黒になっちゃって、ぼろぼろに腐っちゃって、なんかお人よしだよー」

懐かしそうに、愛おしそうに、モコは鳥居をゆっくり撫でた。ほの暗い街灯が、細い手の指を照らして、もっと細く浮かび上がらせた。

「じゃあ、今、白いのは？」

僕が訊くと、

「しつこい。母さんが塗ったの。だからこれ、母さんの鳥居」

嬉しそうに、モコは笑顔で答えた。

「あー、でね、何が言いてーのかっていうと　呪いってのは上書きで消すってこと。黒くなったら白く塗る。これ、鉄則。覚えいてね」

上書きで消す。

意味はよくわからなかったけど、とりあえず、頷いた。

「だからさ七月」

長い髪を手で梳きながら、モコは金色に光る目で僕を見た。

「あたしが塗ってやる。上書きしてやる。七月の上から白いのをいっぱい。もし黒くしようとする奴がいたら　あたしが食うよ」  
にかつと笑い、モコは真つ赤な舌をぺろりと出した。

この子は本当に巫女なのかも知れないと、そのとき初めて思った。

で、後日談。いや、後日というか当日だけど。

家に帰ると、僕の部屋に桃子ちゃんがいた。

カーペットの上に、ちょこんと正座していた。

「え？　い……うあ、お、え、どうした、の」

五十音アの段を駆使しながら、しどろもどろで尋ねると、

「寂しくなったらいつでもって、お兄さん、言ってくれたので……  
来ちゃいました」

照れくさそうにはにかみながら、彼女は答えた。

「え、僕……目、黄色い？」

「黒いです」

法則が破れた。衝撃的だった。

「え、あの……幽霊、だよね？」

「指差すのやめてくれませんか」

「あ、ごめん」

「あと、幽霊だからって幽霊だよねって訊くのデリカシーないと思います」

「ん、あ、はあ、ごめんなさい」失言してしまった、らしい。

なんで目、黄色くないのに見えてるんだろっ僕、と訊いてもわかるわけないだろうから、とりあえずそれは明日、モコが神主さんに尋ねることにする。

それにしても幽霊と知ってから見るとさすがに戸惑う。しかも自分の部屋だからなおさら戸惑う。戸惑いながら、ふと、一つのことを思い出した。

名札。

『四年二組　おおみなももこ』と書かれた名札。ももこ。

「これ……桃子ちゃんのじゃない？」

ポケットから取り出し、差し出したそれを桃子ちゃんは見て、

「いえ、違います」すぐに軽く首を振った。「名前は一緒ですけど、私、苗字は」

「高橋、だ」

新聞で見た名前を思い出し、咄嗟に口に出していた。

「……呼び捨てやめてください」

「あ、ごめんなさい」

なら、これは誰のだろう。僕の知らない別の少女が、桃子ちゃんと同じようにお祈りをして、桃子ちゃんと同じような想いをしていくのかも知れない。その想像は、あまりにもいたたまれなかった。

ももこ。おおみなももこ。四年二組おおみなももこ。

何度も心の中で繰り返し、再び、それをポケットへしまう。

名札の持ち主が誰なのか。

一つの可能性に辿り着くまで、そんなに時間はかからなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2837m/>

---

十三矢モコは黄色い月に唾を吐く

2010年10月8日14時34分発行